

## カウンセリング過程に関する研究

佐 藤 勝 利

### 目 的

この論文では、日常の臨床活動の中で、筆者が体験してきたところのものをあとづけることが目的であった。この目的は大きく分類して次の2つに要約された。

- (1) 成功例と失敗例との比較検討
- (2) 成功的カウンセリングをもたらす諸条件の探索

さらに、この目的に沿って、次の3つの仮説が設定された。これらの仮説はすべてRogersおよびGendlinの理論から演繹されたものであった。

**仮説1** 成功的カウンセリングにおいては、カウンセリングの進行に伴って、クライアントの発言はより焦点づけの高いものになるであろう。

**仮説2** 成功的カウンセリングにおいては、カウンセリングの進行に伴って、クライアントの発言はより肯定的な感情を含むものになるであろう。

**仮説3** クライアントの発言の「内容」は、カウンセリングの成功、不成功と積極的な関係がないであろう。

以上の仮説以外に、目的(2)のためにカウンセラーの発言とクライアントの焦点づけとの関係を検討した。

### 対象と方法

**対 象** neurotic な主訴をもつクライアント5名のカウンセリングテープ計58本が分析の対象となった。

各ケースの年齢は13才～19才、性別は1名を除いて男性。また、面接回数は5回～20回、面接期間は約1ヶ月～6.5ヶ月に亘っていた。これらのケースはカウンセリングの成功度に従って順位づけることが可能であった。ただし、最後の二者については同一順位と考えた。

**方 法** 上述のカウンセリングテープを1面接毎に再生しながら、クライアントおよびカウンセラーの1発言を1単位とし、Table 1 に示すカテゴリーに分類した。

分類は筆者1人が行ない、分類の偏りを防ぐ意味で、全ケースを混ぜ合せ、ランダムに聞きとった。

なお、分類の妥当性を検討するため、2年以上の臨床経験を有する者2名に依頼して、筆者の分類との一致率を求めた。この際用いられた面接は各ケースの前・中・後期に亘るよう配慮した。ただし、5回で中断した2ケースについては、各1面接を抽出した。その結果、分類が完全に一致したのは、平均80.4%であり、満足し得る値を示した。

### 結果と考察

**仮説1について** クライアントの焦点づけの変化は、成功例では、第3段階（感情の表明の段階）以上の焦点づけが、面接回を追うに従って、徐々に増加し、面接の終期には、第4、第5段階の焦点づけが見られた。

Table 1 分類のカテゴリー

a. クライアントの発言の分類	b. カウンセラーの発言の分類
(1) 発言内容	1 方向づけ
1 特に意味をもたない発言	2 解 釈
2 特定の他者についての発言	3 質 問
3 自己についての発言	4 是認と激励
(2) 焦点づけ	5 受 容
1 全く焦点づけのない段階	
2 状況の説明をする段階	
3 感情の表明をする段階	
4 直接的レファラントの段階	
5 「開け」と全面的適用の段階	
(3) 感 情	
1 非常に否定的	
2 否定的	
3 どちらでもない	
4 肯定的	
5 非常に肯定的	

この第3段階以上の焦点づけの増加のあり方は、Jonckheere の傾向検定の結果  $P < .01$  で有意であった。

一方、部分的成功例では、第3段階以上の焦点づけの増加傾向は有意であるが、いくつかの大きな鋸状の動揺が見られた。また、失敗例では、このような第3段階以上の焦点づけの増加は認められなかった。

これらの結果は成功的カウンセリングにおいてはカウンセリングの進行とともに、クライアントの発言は徐々に焦点づけの高いものになっていくことを示しており、仮説1を支持する。

仮説2について クライアントの発言に含まれる感情は、成功例では、カウンセリング過程の中盤に一時的な肯定的感情の高まりがあった後、終盤では徐々に肯定的感情が高まり、ついには、否定的感情を上廻る面接回が見られた。

一方、部分的成功例では、同じように肯定的感情の高まりが見られたが、否定的感情を上廻ることはなかった。また、失敗例では、肯定的感情はわずかに認められたにすぎなかった。

これらの結果は、クライアントの発言が、カウンセリングの成功的進展にともなって肯定的感情を含むようになることを示しており、仮説2を支持するものである。

また、中盤で一旦肯定的感情が高くなる現象は注目されるし、否定的感情の高まりの後に肯定的感情が多く表出されたのは、Rogers らのいう「否定的感情が表出され尽すと、おもむろに肯定的なものが表出される」ことを指すものである。また、成功的カウンセリングの場合でも、クライアントが決して肯定的感情のみをもって終結していくわけではない点も興味ある現象である。

これは、今後さらに検討されなければならないが、クライアントの感情が congruent になり、肯定的なものは肯定的なものとして、否定的なものは否定的なものとして、十分に感情表出が可能となったためではないか。

仮説3について クライアントの発言とカウンセリングの成功度との間には、弱いながら相関が認められた。

すなわち、「特に意味を持たない発言」が成功順位との間に  $-.197$ 、「特定の他者についての発言」が  $.231$ 、「自己についての発言」が  $-.345$  の相関を示した。

この後二者の結果は極めて理解し難いものであった。これらは仮説3を支持するものでもなく、また、Gendlin 以前の研究が取り扱ってきた「内容変数」についての研究課題とも全く異っていた。これは、本研究の対象となった1つのケースが、父親との関係を主訴に來談したものであり、必然的に父親、換言すれば「問題」につ

いての発言が多くなり、しかも、このケースの成功順位が第1位であるために結果を著しく歪めてしまったのではないかと考えられる。

しかしながら、このケースの発言内容の変化を縦断的に辿ってみると、「特定の他者についての発言」が徐々に減少し、「自己についての発言」が漸次増加する傾向が、 $P < .01$  で認められた。

このような結果を考え合せると、「内容」がカウンセリングの成功、不成功に関係をもつことが予想され、今後さらに検討される必要が示唆された。

カウンセラーの発言によるクライアントの焦点づけの変化について カウンセラーの発言によるクライアントの焦点づけの変化から次のような結果が得られた。

「方向づけ」の発言はクライアントの焦点づけを高める傾向があり、しかも成功順位と正の相関があった。

「解釈」の発言は成功例では焦点づけを高める傾向が強く、部分的成功例、失敗例では、焦点づけを高める傾向と低める傾向とが、拮抗していた。

「質問」の発言は焦点づけを低める傾向が、高める傾向よりも強く、しかも、成功順位が高くなるほど、焦点づけを高める傾向は弱くなっていた。

「受容」の発言は、焦点づけを成功例ではわずかに高めるが、失敗例ではむしろ低める傾向を示した。

「カウンセラーの受けがない時」には、成功例よりも、失敗例の方が焦点づけが高まる傾向を示した。

このような結果は、成功的カウンセリングにとって、「方向づけ」および「解釈」の発言は positive に働き、「受容」の発言はあまり積極的な意味を添えず、また、「質問」の発言はむしろ negative な働きをもつものであることを示すものであろう。

ただし、「受容」のカテゴリーは、「繰返し」と「感情の明細化」とに分類し検討される必要が示唆された。

さらに、「カウンセラーの受けがない時」の結果は、カウンセラーとクライアントの関係の反映ではないか。また、以上の結果は、カウンセラーの発言の次にくるクライアントの発言の焦点づけの変化のみを問題としているものである。したがって、これらの変化が一時的なものであるのか、かなり永続的なものであるのか、といった検討、あるいは、焦点づけの段階やカウンセリングの進展との関係についての検討は、今後別の角度から行なわれる必要がある。

なお、カウンセリング過程におけるクリティカルポイント等の重要な問題については、本論文では触れることができず、今後に残された。